

佳作

自慢の祖父

福岡県 福岡県立朝倉東高等学校一年 松井 ほか

私には、とても優しく、働き者の祖父がいます。一緒に暮らしている、毎日一緒にいます。だから祖父のことはよく理解しているし、祖父の好むものも誰よりもよく分かります。一番近くで祖父のことを見てきたからです。そして祖父は、仕事の忙しい母に代わって、洗濯、掃除、料理、ほとんど全ての家事を完璧にこなしてくれます。忘れ物をした日は、学校まで届けてくれて、部活で試合がある日は会場まで送ってくれます。でも、寂しがり屋でもあります。食材を買い出しに行く時、用事がある時、少し外出する時、必ず私に「一緒に行こう」と誘ってきます。私はそんな祖父が大好きでとても自慢でした。朝は、私が学校へ行く時に必ず玄関に来てくれて、ポストに入っている新聞を私に取りに行き、渡してから祖父の「いってらっしゃい」の声を聞き、家を出ます。一度決めたことは必ず手を抜かずやり切る、祖父のそんな性格がよく分かります。毎日必ず、「いってらっしゃい」。「おかえり」。その言葉をかけてくれる祖父の

しまいました。あつという間で、理解が追いつきませんでした。私の心にはとても大きな穴が開き、いつまでもその穴は埋まらないし、悲しくて涙が止まりません。同時にたくさんの後悔も出てきました。どうして祖父に会うことなく家を出てしまったのか。どうして電話をしなかったのか。もっと家事を手伝って楽をさせてあげることが出来たのではないか。ずっと食べたがっていたウナギを食べさせてあげたかった。もう、どうしようもない事だけ何か出来たのではないか、考えれば考えるほどたくさんの後悔が出てきて、悲しみが深くなります。

そんなある日、リビングの一番よく見える窓に、一匹のトカゲがやって来ました。初めは全く気にしていませんでしたが、よく考えると、そのトカゲが来るようになったのは祖父が亡くなってからです。それからは毎日必ずやって来るのです。私には、自然とそのトカゲが祖父であるかのように感じられるのです。「泣かないで頑張っ」。毎日悲しくて泣いていた私へ、そう言いに来てくれているように思えます。

そんな祖父のためにも、仕事を頑張ってくれている母のためにも、悲しい顔を見せず、私に出来ることをたくさんしようと決めました。一番近くでずっと見てきた私にしか分からないことを。料理や掃除、ペットの世話、祖父が私に残してくれた、たくさんのことを。これから

存在は私の中でとても大きくなってはならないものだった。

しかし、私が高校へ入学したころ、祖父が元々患っていた病気が悪化してしまい、入院が決まりました。何度か家で倒れることもあり、入院を何度も繰り返していたので、入院したとしてもいつかまた帰って来る、私の心のどこかにそんな思いがありました。そして、祖父の入院が決まっていたその日の朝、珍しく、祖父は寝室で寝たままでした。急いで家を出た私は、祖父に「いただきます」と言うことなく家を出てしまいました。入院してからは何度か電話をしましたが、電話をしている時の祖父は寂しそうで、とても疲れ切っているような声をしていました。そんな祖父の声を聞くと私も寂しくなってしまう。自分から電話をかけることが少なくなり、話す機会が減ってしまいました。そのまま電話を出来ないほど容体が悪くなってしまう。もうあまり、長くないことを母から聞き、病院へ会いに行ったとき、祖父の姿は変わり果てていました。とてもやせ細っていて、目の焦点が合っていない、口が開いて閉じなくて苦しそうで、それでも私が声をかけると手を振ってくれて、二人で育てていた母が収穫できたことを伝えると、優しく頷いてくれて、会えて嬉しかったけどすごく心が苦しかったです。

そして、そのまま大好きな自慢の祖父は天国へ行っ

私は、祖父が天国でたくさんの人に自慢出来るくらい立派になりたいと思いました。いつも味方でいてくれて、優しく働きの最高のじいちゃんのために。